

優秀賞

## おばちゃんの絵葉書

中央大学高等学校 2年 日開 美来

私はおばちゃんが苦手でした。

私の家は共働きで両親は帰りが遅いので中学生になるまでは祖父母の家で面倒を見てもらうことが多かった。祖父母の家には祖父の姉のおばちゃんと呼ばれる人物と一緒に住んでいた。おばちゃんは昔、階段から転落し脳に障害を負い、上手に話すことができなかった。私は焦点の合わない目と意味のない音を急に発する姿に狂気を感じ、避けるように生活していた。

小学生に上がった頃、おばちゃんは通所介護を受け始めた。介護士さんに勧められて絵葉書を描くようになった。その日のうれしかったことなどをイラストに描いて見せてくれるようになった。大きく描かれた食べ物や花がその日の日の感動を生き生きと表現した力強い絵葉書だった。私もノートやチラシのうらに絵を描いてお返しのように見せるようになった。いつしかそれが幼い私にとつて小さな楽しみになっていった。しかし、中学生になって祖父母の家に行かなくなり、絵葉書の交流を全くしなくなってしまった。

去年の夏、祖父母からおばちゃんを介護施設に入れることにしたと聞いた。その時にはすでに入居している状態でお見送りもできなかった。そして、おばちゃんは介護施設へ入って半年もせずに急病により帰らぬ人となってしまった。コロナで近親者しか面会が許されず血縁としては遠い私は一度も会うことが出来なかった。

お葬式の日、祖父がおばちゃんが描き溜めていた百枚以上の絵葉書を見せてくれた。会わなくなつてからも描き続けてくれていたのだ。そこには春夏秋冬の色々な思い出が色鮮やかに描かれていた。ひまわりがきれいだつたこと、夏のきゅうりがおいしかったこと、文字はなくとも嬉しさが伝わってきた。

文字がなくとも感動や感情を伝えられることを知った。私はこれから絵を練習しようと思う。言葉を超えた交流に思いをさせて。